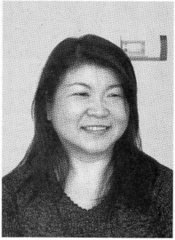
INTERVIEW インタビュー INTERVIEW

関心高まるリ・ファッション

“知恵と技”の回復を目指し

循環型社会への適応に向け



日本リ・ファッション協会代表理事

鈴木　純子氏

低価格な流行の服を次々と買い替えるファストファッションが話題になるなど、ファッションと環境の共存は難しい。そうした中、「リ・ファッション」を掲げ、単なるエコにとどまらず、循環型社会のファッション産業を模索する動きが現れた。昨年九月に設立された一般社団法人「日本リ・ファッション協会」の代表理事である鈴木純子さんに聞いた。

――「リ・ファッション」は新しい言葉ですね。

「最初にリペア（補修）、リフォーム（補正）、リメーク（作り直し）をリ・ファッションの3Rと定義したため、協会に対してエコとかお直しの会というイメージが強いのですが、本来は違います。リとファッションの間に中黒を入れたのは『リ』を際立たせたいためで、今までのファッションの概念を変えていく時期、つまり循環型社会に適応する産業になるため、もう一度考えていきましょうというのが理念です」

――鈴木さんがこの活動に関わったいきさつは。

「私はIT系のコンサルタント会社をやっていて、ある時、クリーニング屋さんのインターネットを使った事業をプロデュースさせて頂きました。するとクリーニングのサービスなのに衣類のことで困っているという問い合わせがたくさん送られてきて、服のことで困っている人がいっぱいいるということに気が付いた。そのため平成十八年に中小企業庁の助成金を受け、衣類に関する困りごとと、インターネットでつないだサービスを使うかどうかという調査をしたところ、衣類のことで困っているという人が七割以上、それをどこに頼んで良いか分からないという人が大半という結果でした。それでマッチングさせるためのサービスを調べると、クリーニング、お直し、デザインから変えるリメーク、さらに最初から自分に適したものを作るオーダーメードなど、サービスはいっぱいあった。みんな気が付かず、知らないから困っているわけだから情報を提供したらいいじゃないかと。さらに近所にサービスを提供出来るところがなければネット上でマッチングさせればいいじゃないかという発想からリ・ファッションの構想が出てきたわけです」

――協会設立の経緯は。

「仲間や業界の方たちと情報交換する中で、リ・ファッションというキーワードなら一致団結出来そうだということから、昨年七月に文化女子大学でリ・ファッション・ワークショップというイベントを開催しました。それがきっかけになり、この活動を一過性のものにしたらつまらないということで一般社団法人を設立することになったわけです」

――ワークショップを開いた目的は何だったんですか。

「たまたまこのイベントの計画を最初にお話をしたのがお直しの会社が情報交換する場で、そのイベントでお直しの日を普及させたいという話が持ち上がり、語呂合わせで七月四日が0704でお直しと読めるから、その日にイベントをやろうということになった。ところが企画をまとめていく中で、リ・ファッションの理念が分かるようなイベントにしようという結論になり、服を選んで購入し、買った後のケアやメンテナンス、手放す時のリサイクルなど、リ・ファッションの全体象がうかがえる出展構成にしたわけです。テレビや一般紙でも取り上げて頂き、八百人を超す来場者があり大きな反響がありました。九月に出展者と関連企業を集めてワークショップを行いましたが、それをきっかけに事業提携を始めたところも現れています」

――協会のメンバー構成は。

「会員は三つに分かれ、企業会員と個人会員が計約四十、それと一般の人が中心のオンライン会員が約百三十五人で、現在合わせて約百七十五の会員です。それ以外にイベントなどの情報提供が出来る三千弱のメールアドレスを持って情報発信をしています」

――具体的にどんな事業していくのですか。

「事業は四本柱で、まずリ・ファッションの普及事業が一つ。第二がリ・ファッションを楽しんだり伝えるための人材育成と、その人たちが仕事を出来る場を作る目的で資格認定事業を行います。第三はファッションに関係するCSR事業の協力です。第四は今春までにオープン出来そうですが、Webサイトを使ったマーケットの創出です。リ・ファッションの専門家として全国のオーダーからリサイクル、お直しに至る受け皿を用意し、どこからでもご利用頂けるリ・ファッションアベニューというサイトを開設します。サイトは二十四時間いつでも使えますが、対面を希望する人のためにホテル、百貨店などでサービスを受けられるリアルな場という二本立てを計画しています。それとこれは準備中ですが、普及事業としてリ・ファッションを推進、楽しむ全国キャンペーンを業界と一緒に取り組んでいきたいと考えています」

――目指す方向は。

「最終的には循環型社会への適応ですが、私たちはエコの団体ではありません。エコありきで始めた活動ではなく、やっていることが結果としてエコにつながっているだけです。協会は循環型社会における豊かな生活を実現する日本の知恵と技（ワザ）の回復を提唱し、初年度として巧みの手仕事で自分価値に変える、再びよみがえらせる、というスローガンを掲げました。モノがなかった時代には工夫していたし、ワザがあり楽しくやっていたはずなのに、無駄をすることが豊かだという風潮にいつのまにかすり替わった。原点に戻ればエコにもつながってくるし、モノがない時の方がワザや知恵を磨いて心が豊かで、出来てきたものも洗練されていた。それが本当に産業として発展するもので、職人さんも限られた中でいいものを作っていくとなると、自分のワザで勝負するようになる。ファッションビジネス学会でリ・ファッションをテーマにパネルディスカッションを開いて頂いたり、大学の先生方がリ・ファッションについて論文を発表して下さり、趣旨に賛同して頂ける人が増えています」